

# CURES

## NEWSLETTER

地域経済  
ニュースレター

1987.5.15 No. 3

### 巻頭言

## 技術的視点から考える

西 端 敏

何事によらず、合理的に物事を進めて行くには、まず目的を明らかにし、ついで目的達成可能な複数の代替案を考え、その中から評価基準に見合ったものを一つ選択する、これが一般的なプロセスだろう。したがって、目的があい昧な場合は論外として、評価基準があい昧であったり揺れ動いたりすると、プランナーは大いに困惑することになる。

設備更新、設備保全の問題といえは、企業では地味な問題で、特に後者などは不況になれば有無をいわずその費用を削減されるのが常である（本来もっと注目されてよい分野だと思う）。工学（技術）が理学と異なる点

は、経済性を意識するか否かだといわれているが、この問題など、技術と経済の境界にある典型的な問題の一つであろう。ここで、研究者を悩ませるのは陳腐化の問題である。陳腐化とは、物理的に使用上なんら差し支えない設備が、新鋭設備の出現によって、とって代わられるという、いわば機能の相対的劣化を意味する。したがって、今日の技術革新の加速化はすべての設備の陳腐化を加速化しているといえよう。「新しい」といえば肯定的にうけとられる事が多いが、果たしてこの場合良いといえるかどうか。良いとしても、それは誰にとって良いのか。なぜそんな事と

- |                          |         |
|--------------------------|---------|
| ■ 巻頭言                    | 西 端 敏   |
| ■ CURES Report           |         |
| 「売上税をめぐる今後の問題点」          | 山 村 勝 郎 |
| ■ CURES Salon            |         |
| 「私の研究関心」                 | 平 館 道 子 |
| ■ Topic                  |         |
| 「中国農業の行く手に黄色信号！」         | 内 山 雅 生 |
| ■ Information Processing |         |
| 「パソコン LAN」               | 木 村 春 彦 |
| ■ 地域経済文献情報               |         |

思われるだろうが、それは、評価基準の選定の問題に絡むからであり、さらに目的とも密接に結びついているからだ。

いささか前置きが長くなった。日本の技術進歩はまさに日進月歩、もはや目覚ましいというより、空恐ろしいと言った方がいい。これだけ技術の進み方が早く、競争が激烈になると社会的影響も当然加速化し、大きくなる。そして、この『進歩』の早さは「ついていけない」程度を超えて、社会的弱者（いやな言葉だ）を増加させ、いわば人間の陳腐化を促進しつつあるように思う。技術の猛スピードの高度化は、結局不適合な人間を大量に作り出し、産業界いや社会から排除し、多くの人々は社会の『お荷物』としてひっそりと社会の片隅で生きて行くことになるのか。技術は人間に奉仕する為に作られ、磨かれてきた筈だ。それが意図せざることとはいえ、人間に銃口を向ける結果になるのだろうか。実をいえば人間はすでに産業革命でこれに似た経験をしている。

未だにその全貌は見えないが、今回のいわゆるME革命のインパクトは、想像を超えて更に巨大なものとなりそうである。当然、産業革命と同様に、プラス・マイナス両面を持ち、単純に肯定も否定もできない。ただ、産業革命より遥かに広い領域にわたって影響を及ぼし、国内はもちろん、国際的波紋を生ずることも十分に予想できる。事実、こうした状況の中で、し烈な企業間競争の結果、構造不況をうみだし、時には血税を使って、十分使用可能な設備が次々と廃棄されてゆく。甚だ納得し難いところである。その「競争」の中身にも疑問がある。技術の進歩は、質の向上、コストの低下をもたらし、消費者に廉価な製品（サービス）を潤沢に提供した。品質、

数量、納期そしてコストのどれが欠けても企業は競争に敗れ、脱落してゆく訳だが、近頃の傾向として、顧客のニーズへの適合という大義名分のもとに、この4要素のバランスが狂って来だしたのではないか（むろんこの4要素のバランスは難しい問題ではある）。そして、このくるったバランスのもとに評価基準が定まり、十分、品質を充足できるにも拘らず、数量・納期・コストの面で陳腐化している設備が、次々と廃棄されて行くのは本当にいいことなのかどうか。疑問はつきない。尤も、この疑問は製造設備の問題にとどまらない。日本では「陳腐化」の発想が物全般に及んでいるように見える。たとえば、建築物。生活様式の近代化、町の近代化(?)に抗しきれず、建築後20年もたたぬうちにとり壊される建物の近頃なんと多いことか。地球の資源は無限と考えるか、有限と考えるかで見方は変わってくるのだろうが、たとえ、そのコストを他者に転嫁できるとしても理解しがたい。

このように見てくると、近頃は、本来技術的な問題にまでもいやが上にも思惑的、過当競争的な日本の特殊事情(NICS 諸国の追い上げも加わって)に踊らされ、日本全体の尺度が狂いだしたのではないかとまで思ってしまう。一般に、大所高所からの発言が好まれようし、重要だとは思ふ。だが、かなり捨象された情報に頼らざるをえないところから、捨象にもし誤りがあった場合、その発言はまさに砂上の楼閣となってしまうこともあり得よう。具体的な問題を出発点とし、企業の小さな問題点に光をあて、いわば素朴な疑問から出発して、我々が無意識に使っている基準を見直してみるのも大事なことでないだろうか。